

国交50年と日加協会の歩み

日加協会会長 近藤 晋一

昭和四年十月十二日、わが国の初代駐

加公使、徳川家正公爵がピクトリアに到着した。その時、マッケンジー・キング首相は、徳川公使に電報をもって初代日本公使のカナダ到着に祝意を表明すると共に、十月二十一日、公使をカントリー・クラブでの歓迎晩餐会に招待した。着任する外国使臣に接受国の首相が歓迎のメッセージを送るのは異例なことであるが、これは当時カナダ政府が日本との外交関係の設定に熱意を抱いていたことを示すものといえる。

徳川公使は、十月二十一日、ウルリンドン総督に信任状を捧呈し、同夜カントリー・クラブでの盛大な歓迎晩餐会に出席した。キング首相はその歓迎の辞の中で、日加間の外交関係の樹立の意義について次のように述べている。

「カナダは好むと好まざるにかかわらず、その対外的関係の急速な進展を避けることはできない。カナダの置かれた地政的地位及び英連邦の一員としてのカナダの立場から生ずるであろう特別な責任、義務及び機会から逃れることはできない。(中略) 米国はカナダに最も近い隣国であり、北米大陸における唯一の隣国である。

る。フランスはヨーロッパ大陸でわれわれの最も古いかつ近い隣国である。日本

はアジア大陸における最も近い隣国である。(中略) 世界的観点からすれば、カナダはこれら三国に三方から囲まれた円形劇場の中心に位置するといえよう。わが国の安全保障のためには、これら諸国との友好親善関係を促進することが必要なのである。」

英連邦の自治領であったカナダが、米国及びフランスに次いで日本と独自の外交関係を樹立し、公使を交換することについては、カナダの国内において論議をまきおこしたことは事実である。例えば、一九二九昭和四年、連邦議会において東京に開設されるカナダ公使館予算(五万ドル、在米公使館総予算五十万ドル)が審議された際、野党保守党のジョージ・パーレイ議員は、

カナダの外交的選択は英帝国の一員として留まるか、英帝国より独立するかの何れかであるが、もしカナダが日本と公使交換をすれば、他の自治領もこれにならば、英帝国の結束を破壊するであろうと、公使館設置予算に反対した。

これに対しキング首相は、(一)カナダは今日世界の平和と戦争の鍵を握る英米仏日四大強国間の中心点に介在する地位にあり、カナダとしてこれら強国と密接な関係を維持せねばならないこと、(二)カナダは英連邦の一員としての立場を堅持するもので、英連邦よりの independence を求めるのではなく、カナダの self-dependence を強めようとするものであること、(三)カナダの対日輸出貿易は三十年前に比し三十倍に急増し、日本はカナダの輸出市場として第三位を占めており、通商問題、移民問題を始め多くの対日問題について、カナダの事情を熟知している使節を東京に駐在させて、カナダの世論を日本国民に理解させることが必要であること、等の諸点を挙げて反駁した。

キング首相の独特な世界政治論は別として、カナダ政府が日本と外交関係樹立に踏切った主要な理由として、輸出市場としての日本の重要性の認識があったことは否めないであろう。

キング首相は、昭和四年一月十一日、初代駐日公使ハーバート・マラーの任命を公表したが、オタワ・ジャーナル紙

は、「日本は今や急速に西欧化しつつあり、その主要都市で西欧製品の需要が増加しており、しかもその多くをカナダが供給しうる。マラー氏が貢献しうるのは外交方面でなく、経済関係の増進にある」と論評している。

またマラー公使も昭和六年八月二十一日、バンクーバー商業会議所とカナダ製造業者連盟との会議の席上、(一)カナダの生産は年々増加しているので、輸出市場の開拓の必要は年と共に増大している。しかし、欧州諸国はその現状からみて今後有望とは思えない。したがって、市場として無限の機会をもつ東洋はカナダの将来にとって極めて重要であること、(二)日本人は礼儀正しく親切にして勇氣ある国民である。日本への輸出を拡大するためには、カナダ実業人が実地に視察研究することが肝要であることを述べている。

カナダの実業界においても、第一次大戦以後、日本及び中国の市場開拓の必要性を認め、再三視察団派遣を計画したが昭和三年カナダ商業会議所はその年次大会において、東洋実業視察団の派遣を決議し、準備委員会を設置した。

カナダ商業会議所副会頭ジョン・イムリーを団長とする約四十名の実業家視察団は、昭和五年十月二十七日横浜港に到着、十一月十四日神戸港から上海に向けて出発するまで、日本の各都市を訪問した。

この視察団の訪日は日加通商史上画期的な出来事であった。日本側では官民を挙げて最上の接遇を与えたことは勿論であるが、日本の各新聞もこの訪問を大々



徳川駐加初代公使